

これからの地域コミュニティに求められること

吉村 輝彦

日本福祉大学 国際福祉開発学部

1. 「これまで」と「これから」

- ・価値観やライフスタイルの多様化（働き方、暮らし方、住まい方、家族のカタチ、所有の捉え方他）を前提にしていく必要性。
- ・「これまで」の当たり前と「これから」の当たり前は違う。
- ・「これまで」の前提と「これから」の前提は違う。
- ・「これまで」の延長線上に、「これから」があるとは限らない。むしろ、「これから」をイメージして、そのために、今から何をなすべきか考えていく必要がある（バックカスティング思考）。
- ・改めて、何を大事にしていくのかを確認する。継承と変革。ビジョンとして描く。

2. 「これから」をどのように見据えるのか

- ・SDGsの理念、多様性と包摂性を大事にした「共生」の時代へ。交じる。尊重や寛容。
- ・「参加」の時代、地域をベースにした取り組みの重要性。上意下達ではなく、今こそ、自治としての組織のありようが問われている。
- ・地域において、多様性や異質性を理解するための対話や交流の場づくりが大事。場づくりをファシリテーションできることが大事。
- ・こうした社会の変化にどのように対応していくことができるのか。時代にあった取り組み、仕組みにしていけること。常に学んでいく、チャレンジしていく姿勢が大事。

3. 「コミュニティ」や「つながり」の多様なカタチ

- ・「地域コミュニティ」や「人間関係」の希薄化も、「希薄化」の捉え方には多様な見方がある。「濃密化」がいいのか。濃淡には、幅がある。
- ・「つながり」は大切であるが、心地よい関係性（つながり）は、人それぞれ。つながりは、その有無から強弱へ、そして、グラデーションとして見ていく方がいいのではないかと。多様性の一端。

4. 参加の「楽しさ」

- ・参加の「正しさ」と参加の「楽しさ」。「楽しさ」がないと長続きしない。「楽しい」から主体的に関わることができる。
- ・何かを消費することを通じた受動的な「楽しさ」（満足度）よりも、何かを創造すること／企画や運営することを通じた能動的な「楽しさ」（達成感）が大事。
- ・「楽しい」から「煩わしい」こともできる。その「何か」が肝心。
- ・「ワクワクドキドキするのだろうか」が大事なこと。自分も、相手（他者）も。
- ・「義務」ではなく、「共感」から広がるということ。

5. これからの地域コミュニティに求められる取り組み

- ・「地域」「コミュニティ」ってどのような存在なのかを改めて問い直してみる。
- ・改めて、「これまで」を振り返ってみる。「これから」は、前例踏襲では動かない。前例は、その時点の社会を前提にしている。改めて、自分たちは何がしたいのかを出発点にしていく。
- ・課題解決だけではなく、価値創造を。そして、想像力（imagination）と創造力（creativity）を駆使する。
- ・まち（コミュニティ）で、どんな暮らしをイメージできるんだろうか。コミュニティのビジョンを作っていく。例えば、まちに多様な場所がある、そして、まちに自分の役割／出番がある。そんなビジョンを実現していくために地域のコミュニティがある。
- ・まちに、多彩な「広場」や「縁側」があることが大事。そのためのプレイスメイキング。やりたいことが実現できる。自分の出番や役割があると感じられる。
- ・誰かに言われたから行うのではなく、自分はこうありたい／こうしたいと思うから行う。
- ・みんなが同じことを同じだけやるのではなく、できる人ができることをできるだけやる。人それぞれの好きなこと、関心があること、得意なことをうまく活かしていく。そこに暮らす人々の可能性を活かしていく。それぞれに応じた役割や出番を。関わりしろ／余白／余地があること、そして、それを感じられることが大事。

■私から拓く取り組み：それぞれにできることがある。気楽に小さく、柔らかに進め、楽しさを大事に。できるところからやってみよう。私から始まる「自分ごとの」取り組み。そこから広がる縁。パブリックは、私から作っていける、そして、広がっていく。マイパブリックが発現する機会をデザインする。「マイパブリック」（田中元子）と「パブリックハック」（笹尾和宏）。

■多様な想いから紡ぎ出す取り組み：まずは、対話や交流から、互いを知るところから始めよう。自分だけではなく、相手のことを気にしよう。多様な想い、そして、縁（つながり）が新たな可能性を生み出していく。人と人とをつなぐプラットフォームづくりが、コミュニティを育てていく。